

次代へ守り伝える

鐘踊り（県無形民俗文化財）



猿田彦

「エヘン。東西！今日此の度、鐘踊り。
「庭奉納つかまつるうがため、
これまでまかり下って候！」
棒振りの口上だ、
「へー」

全員が掛け声とともに踊りに入る。
太鼓や鐘の音に合わせ、小学生から大人まで
総勢22人の踊り手たちが勇壮華麗に舞う。
次代へ守り伝えるため、
地区が一つになり行われる鐘踊り。
そこには、世代を超えた支え合い、
助け合う絆がある。

由来

阿波国白地の城主大西備中守元武
が、1577（天正5）年に土佐の
長曾我部元親に追われ、伊予国金川
（四国中央市金田町）の轟城で討死
を遂げた。備中守は地方の豪族とし
て善政を施し、民心のよりどころの
人であったと言われる。備中守の没
後その一族郎党は、彼の善政を称え、
徳を慕い、その霊を慰めるために各
地に大西神社を建立し、その命日を
祭祀とした。その神社は徳島県20社、
香川県6社、愛媛県8社、高知県1
社の35社を数える。

鐘踊りは、大西幽心斎源武政が
1691（元禄4）年に「大西軍記」
を書き上げた時をもって、備中守の
霊を慰めるために始めたという伝え
があるが確証はなく、戦乱の静まっ
たころつくられたものと推測するし
かない。ともかく、大西神社の例祭
日である「八朔」に奉納される念仏
踊りとされている。現在は踊り子の
小学生のことを考えて、1982（昭
和57）年から8月の最終日曜日に行
われている。

明治の一時期鐘踊りが途絶えかけ
た時があった。ところがその年は赤
痢が大流行し、36人もの患者が出た。
氏子の1人は夢うつつの中に衣装を
つけて踊る姿がちらついていた。「これは
さだめし、大西様が踊りを続けるよ
うにとおっしゃるのだから」という
ことになり今日に及んでいる。

踊り子

■面（猿田彦）：成年男子1人
竹で編んだかごに紙を張り、棕櫚で
つくった頭髪、天狗鼻をつけ、朱色に
塗った面をかぶる。さらにしめ縄を帯
にしてわらじを履く。腕には棕櫚をく
るりと巻きつけ毛が生えているように
見せ、同様に面の鼻とあごにも鬚をつ
ける。

露払いの先導役として行列の先頭を
行き、境内で神事が始まると神官の動
作と反対の仕種をしたり、踊りでも反
対の所作をしたりするが定位置はなく
1人ほどの両端に紙垂のついた棒を
持つて自由奔放に踊る。踊り子中唯一
の道化者である。

■棒振り：成年男子1人
伊賀袴に錦の陣羽織を着て、襷をか
け鉢巻を締めてわらじを履く。1.3
人ほどの竹の棒の両端に五色の紙垂で
飾ったものをつけ、さらにその部分に
鈴をつける。棒自体も竹鈴となってい
て、激しく振ると音を発するようになっ
ている。

太鼓の打ち方に応じて跳躍・あるい
は転身して踊りの区切りを示す。激し
い跳躍を繰り返して重要な役割をもつ。



■太鼓：成年男子2人
親太鼓・子太鼓に分かれるが踊りの

リーダーである。五弁の桜花を形どつ
た台の上に桜の造花を飾りつけた笠を
頭に載せ、伊賀袴に陣羽織を着て、襷
をかけ、わらじを履く。

陣太鼓を腹に結びつけ、両手で打ち
鳴らし、跳躍しながら踊る。始終静ま
ることなく動く。



■鉦：成年男子10人
直径60センチほどの竹で組んだ丸い笠の
全周に赤い紙垂を垂らし、笠の上には
やすらい花風の種々の造花や揚羽蝶・
風車を飾りつけた笠をかぶり、袴を着
けて草履を履く。蔵手の握り柄をつけ
た直径15センチほどの鉦を左手に持ち、そ
の柄にひもを結びつけ手から離れぬよ
うに鉦とともに白布でぐるぐる巻き
つける。右手には五色の紙垂で飾った
T字型の木槌を持つ。

陣容は、大関側・小関側とそれぞれ
左右に5人ずつ縦に並び、踊りの間中、
大関の笠につけた風車はまわり続けて
止まることかない。



■ハツリ：小学生男子4人
伊賀袴に錦の陣羽織を着て、鉢巻を
締め、襷をかけ、わらじを履いた凛々
しい姿である。

1人ほどの木製のマサカリを持ち、
鉦・太鼓の音に合わせてマサカリを打

ちおろす動作の踊りを繰り返す。



■長刀：小学生女子4人
白衣に緋色の袴を着け、襷をかけ、
白い鉢巻を締め白足袋で草履を履く。

1.3人ほどの木製の長刀を持ち、鉦・
太鼓の音に合わせて前方に向かって下
から上へと左右交互に切り上げる動作
を繰り返す。

斜め十字の切り方、襷がけは悪魔払
いを意味する。



踊りの構成

鐘踊りは、形態の異なる四つの踊り
「よせ」「七つ」「三つ」「九つ」で構成
されている。この四つを合わせて一庭
と呼び、およそ40分間、間に休憩を入
れながら合計三庭踊る。これとは別に、
踊り場に入る際に踊る「討ち入り」と、
全ての踊りの終わりに踊る「ヤレトウ」
とがある。

踊りの所作には、おがみ・刃物研ぎ・
切れ味試しなどの意味があり、勇壮で
激しく、唄が入る部分・締太鼓のソロ・
鐘もあり、にぎやかで飽きさせず、全
体を棒振りと締太鼓がリードする。ま
た、猿田彦が道化師役を演じて、楽し
ませてくれる踊りである。

（参考資料 新宮村誌、別子山村・新
宮村民俗資料調査報告書）



1. 当屋から大西神社へ(道引き)
2. 踊り坂(30分の急峻な山道)
3. 本番前のひととき
4. 討ち入り
5. 神事やおどける猿田彦
6. よせ
7. 七つ
8. 三つ
9. 九つ
10. ヤレトウ

支える

大西神社は、稲荳神社の境内社の1社である小祠で、西庄地区の田之内・倉六部落(上部落)と大窪・内野部落(下部落)の代表者がそれぞれ、責任総代と会計総代になる。このほか、各部落総代2人と倉六1人の計7人が例祭行事を世話する。

今年責任総代が当屋を引き受け、鐘踊りの世話役として、踊り手たちの衣装を着替える場所の提供や昼食の賄いを振る舞った。

責任総代の藤田紘正さんは、「全国的に都市に若者が集中し、高齢化が進む中、健康面でも体力面でも準備作業に大変です」と伝統を継承する難しさを話しながらも、「鐘踊りは新宮のふるさとに伝わる貴重な踊りです。この文化を保存継承できるようにするのが私たちの務めとと思っています」と力を込める。

当屋でのお接待



守る

継承者が毎年のように減り続け、わずかの有志で続けるには負担が掛かり過ぎる。このままでは滅びるのではないかと心配する声が高くなり、1966年に「鐘踊り保存委員会」が結成され、1971年に「鐘踊り保存会」に発展した。

過疎の始まる前の新宮地域は、1950年が6160人で、今は1200人位。しかも65歳以上の割合は約50%で、近年では子どもだけでなく、大人の人材も不足している現状。そのため数年前から、西庄地区だけでなく、新宮町や新宮町出身で、現在町外に住んでいる大人や子どもにも範囲を広げて踊り手をお願いしている。



鐘踊り保存会会長
由藤博明さん

保存会の由藤会長は、「若い人材の確保を目指して、長きにわたり継承していきたい。また、機会があればさまざまなイベントに参加し、全国に知られるような祭りになっていきたい」と更なる発展に意欲を見せる。

つなぐ

地域の協力
鐘踊りに欠かせないのがマサカリや長刀などの道具だ。「限られた予算のため毎年補修しながら大切にしている」。本番に向け、地域の人が笠張り作業を行う。



■新加入
後継者不足に悩む鐘踊りだが、今年新加入した由藤さん(新宮小中学校1年)の鈴木華奈さんと南小中学校5年の脇 里奈さんの2人が新しく参加した。

「練習期間が2週間あるため、小学生でも十分覚えることが可能。指導は、鐘踊り保存会発足当初から踊りに携わっている藤田忠正さんや石川福督さん、私が主に行っている」と由藤会長。初参加の2人も、「初めは難しかったけど、優しく指導してくれて、だんだんできるようになった」と口をそろえる。



■家族の協力
鐘踊りの練習は、20時〜22時まで2週間行われるため、子どもたちの送迎に家族の協力が必要で、踊り手はもちろんのこと、家族や地域の人

の支えが必要となる。

片道40分、妻鳥町から家族総出で参加した由藤さんは、「練習が終わって家に帰り、寝る頃には12時を回っている。夏休みじゃないとできない」と苦笑い。「でも、伝統ある鐘踊りを絶やしたくない。子どもたちも鐘踊りに楽しんで参加している」と前向きだ。

踊り手の継承

はつりで参加した由藤 響君、長刀で参加した眞鍋ななかさん、大西七星さんは、小学6年生のため今年が最後になる。

由藤君は「今年が最後だったのでしっかりと練習に取り組んだ。練習のこともあって本番では上手く踊れたのでよかった。機会があれば、棒振りや太鼓、鉦にも参加したい」。大西さんは「しんどかったけど最後までできた。今年新加入の1年生に教えることができてよかった。弟がいて教える機会があると思うので、新しい子が入ったら、小さい子、わからない子に教えて、どんどん人が増えればいいと思う」。眞鍋さんは「鐘踊りがこれまで続いてきたのはいろんな人のお陰。この凄行事に参加できてうれしい。いろんな人に鐘踊りの楽しさを伝えて、広めていきたい。機会があれば、新しい子たちに教えていきたい」と3人も笑顔を見せ、これからも鐘踊りに関わっていくことに意欲を見せた。

伝統をつなぐ児童たち

写真右から
大西七星さん(新宮小中学校6年)
脇 里奈さん(南小中学校5年)
鈴木華奈さん(新宮小中学校1年)
由藤ゆきらさん(妻鳥小学校2年)
眞鍋ななかさん(新宮小中学校6年)



写真右から
田中義明君(新宮小中学校5年)
大西英翔君(新宮小中学校4年)
田中康裕君(新宮小中学校5年)
由藤 響君(妻鳥小学校6年)
由藤さららさん(妻鳥小学校4年)
由藤光悦君(川滝小学校3年)



心をつなぐ

今、都市化や核家族化、少子高齢化などの進展により、地域の連帯感が薄れるとともに、地域社会における人間関係の希薄化も進んでいます。

こうした中、鐘踊りが行われる西庄地域では、鐘踊り保存会が母体となることで地域内外から幅広い年齢層が集い、300年以上続く伝統を継承していくため、地域が一つにまとまり、守り続けていきます。

そこには、地域住民の誇りと、ふるさとへの思いが見えてきます。

鐘踊りが人と人の心のつながりの大切さや地域活動の大切さを教えてくれました。